

令和元年6月14日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04430

研究課題名(和文) 幼児・学童期における立体造形と描画の発達段階の共通性等についての研究

研究課題名(英文) The study about commonality of the development stage between three-dimensional modeling and drawing in childhood and school-aged children

研究代表者

浅海 真弓 (Asami, Mayumi)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：50533428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究により、図式期までは描画も立体造形の能力も同じように発達するが、中学年以降はそれぞれの媒体の特徴等により、立体造形能力は描画と比べ、表現としての発達が停滞気味となることが明らかになった。

又、描画においてモチーフの側面を想像させるなど、活動に特別の状況を設定することが子ども達の造形意欲を刺激することが分かった。さらに描画表現が得意なタイプ、粘土造形の得意なタイプ、モデルを見て描くことで表現が豊かになる、反対に表現の妨げになるケース、写実的な表現に長けたタイプ、対象をデフォルメして表現をするのが得意なタイプなど、同学年の子ども達であっても様々な表現傾向やタイプに分かれることが確認出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、科学的な調査や検証が十分に行われて来なかった立体表現の発達段階について研究が進んだと言える。これまでは立体表現の発達段階は描画に準ずると想定されてきたが、小学校底中学年以前はそのような傾向が見られものの、その後はそれぞれの媒体の特徴により違ったものになっていくことが分かった。又、立体表現が得意なタイプの子どもが描画表現が得意であるとは限らないことも分かった。これらの研究成果により、立体表現と描画表現の各発達段階に考慮した題材開発が可能になると共に、今後、その成果が子どもたちの造形タイプに即した指導方法の開発の手掛かりとなることが期待出来る。

研究成果の概要(英文)：We made obvious that children's ability of three dimensional modeling and drawing develop with almost same steps until Schematic period from this study. After then these ability develop on each way. Specially, development of three dimensional modeling ability step is tendency to get stuck compared to drawing ability. Also, we confirmed special approach for children get stimulation to children's drawing ability, for exsample, makeing imagination of side of objects. We found out children can be divided to some kind of cleating type even they in same period. some kind of children get good influence from observing of model, but other some type children get bad influence from it, some type children tend to like realistic representation, and some kind type children have good ability of deformation express. These situation confirmed in both three dimensional modeling and drawing.even so same period.

研究分野：工芸教育、美術教育

キーワード：描画表現 立体表現 発達段階 美術教育

1. 研究開始当初の背景

申請者のグループは大学生を対象に立体造形と描画を往還した造形教育の効果について研究を行ってきた。その研究で明らかにしてきた領域を横断させた造形教育の理念、内容、方法を幼児および学童期における造形活動に適応させることによって、より創造的な造形能力の育成を効果的に図ることが出来ると考え、本研究に着手した。

2. 研究の目的

幼児期から児童期における立体造形の発達段階（発達の順序生や構造）を明らかにするとともに、描画の発達段階とその共通性、独自性を探り、それらを基に、立体造形と描画を往還させた領域横断的造形プログラムを開発し、その有用性を検証する。

3. 研究の方法

- (1) 造形能力の発達に関する先行研究を分析、問題点を明確にし、先行研究の追実験を行い、新たな調査・実験方法について検討する。
- (2) 立体造形と描画発達の共通性、独自性を調査する実験プログラムを作成し、予備実験等でその実効性と有効性を確認する。各協力学校園にて実験を実施する。
- (3) (2)の調査、実験結果を分析し、それまでの研究成果を基に立体造形と描画を往還させた領域横断的造形プログラムを作成し、協力学校園等で実施し、その有効性の検討を行う。

4. 研究成果

(1)

図式期における特徴的な表現形式である「基底線」に着目し、描画と立体表現の比較実験を行った。立体表現における基底線意識の有無を確認するとともに、造形（描画・立体表現）発達上の「基底線」の意味や意義を改めて検討した。その結果、立体表現においても基底線もしくは「基底線に準じる規準系」が意識されていることが分かった。特に図式期の立体表現では、立体を立面図的に捉えることで空間を秩序づけている可能性が確認できた。これを基に描画と立体表現を関連付け、共通する造形発達の筋道としてまとめたところ次のような段階に分類することが出来た。

1. 表現意図が現れる段階
2. 空間意識が現れる段階
3. 写実的な志向が強まる段階
4. 再現的な表現が志向される段階
5. 好みによって表現を選択する段階

(2)

粘土造形活動の際よく見られる「クッキー表現」に着目し、ネコの側面描写と粘土造形により、子どもの奥行き意識、奥行き表現がどのような特徴を示しながら変化していくのかを分析すると共に、「クッキー表現」の出現要因との関連性を考察した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

1. 描画の奥行き意識は年長、奥行き表現は中学年が能力の移行期となる。
2. 年中の粘土造形の「球状」表現は、立体表現ではなく、おだんご遊びの延長により表われるものである。
3. 図式期におけるクッキー表現は、描画と同様に、対象のイメージを特徴的に表しやすい視点が設定されることにより出現する。この時期の子どもたちは奥行き表現に関心が向かず、必要性を感じていない可能性が考えられる。
4. クッキー表現は中学年以降、描画の奥行き表現能力の向上と共に減少するも、半数ほどは引き続き出現する。この要因としては、描画と比べ粘土造形のための情報量が圧倒的に多いことなどから、混乱が生じるため、又、高学年以降では、粘土造形への自信のなさや、又「かわいい」等の表現基準を優先させるため、クッキー表現が引き続き意図的に用いられる可能性がある。

これらのことから、図式期におけるクッキー表現は、基準面をもとに対象のイメージを特徴的に表すといった描画、粘土造形共通の造形方略の下、出現する。その後、クッキー表現は描画の奥行き表現能力の向上に伴ない、減少するものの、粘土造形のために扱う情報量の多さや、経験不足から来る苦手意識、又、「かわいい」等の価値観の選択等の消極的、積極的な要因から、ある一定数出現し続ける。この成果から立体造形と描画の発達段階の共通性等を端的にまとめると図式期までは描画も粘土造形は、同じように発達するが、中学年以降はそれぞれの媒体の特徴等により、粘土造形は描画と比べて、表現としての発達が停滞気味となると言える。

又、本調査から、同一児童の描画表現と立体表現を比較してみた際、どちらともに優れた表現が見られるケースと共に、どちらに偏って優れた表現が見られるケースも多く確認出来た。

(3)

モチーフを「人物」とし、幼児から中学生を対象に、モデルを用いた場合と用いない場合の比較実験を行い、モチーフを見ることが描画及び粘土造形にどのような影響を与えるのかを、グッドイナフ人物知能検査の要素項目を用いた作品分析によって考察した。この調査から、以下のことが確認できた。

1. 描画ではモデルを観察することで得られた要素がより多く表現に反映されやすいが、粘土造形ではモデルの観察が表現に結びつきにくい。
2. 図式期において多く出現する平面的なクッキー・クレープ表現は、平らな粘土の表面を基底面とみなすという点で描画に準じた表現であり、描画と同じくモチーフやその要素の輪郭を表すために出現すると考えられる。
3. 低学年の粘土造形では3割程度が描画と比べ人物の構成要素を表現出来るケースが見られる。この理由としては、この頃の子どもの粘土への親和性、及び、彼らが視覚だけでなく触感により得た情報や経験を生かし、表現を行っていることが考えられる。
4. 粘土造形で写実期に入ると、人物の頭部を団子や塊で表現するケースや立像表現が増える。これは空間認識力が増す中、立体のモチーフを平面的に表現することに違和感を覚え、立体的な表現が試行されたからだと考えられる。
5. 描画も粘土造形も輪郭により形をとらえることを脱し、塊や厚み、面を意識し立体的にモチーフを表現するのは自然な造形発達においては困難であり、特別な訓練が必要となる。
6. 高学年となると、描画、粘土造形共にモデルの有無に関係無く簡略化やキャラクター的表現が見られようになる。これは意図的に好みの表現様式が選択されたことと、及び、5. であげたように特別な訓練がなされないため立体的に表現が出来ず、他の価値観への転換が図られたためだと考えられる。

この実験では、モチーフを見ることによって、描画では一定の上昇が見られたものの、粘土造形においてはほとんど差が出なかった。その理由としては子ども達が見ること、また見たことを表現しようとする必然性や意欲を感じていない、対象をどう見ればよいのか自体が分からない、特に粘土表現では見たことが技術的に表現できない等の理由、又、各学年、個々人の発達段階や特質による違いが大きいと考えられる。

一方、本調査から粘土造形の得意な子どももいれば、見て描くことで表現が豊かになる子ども、写実的な表現に長けた子どもや目を見張るようなイラスト表現をする子どもなど、様々な表現傾向のタイプに分かれることが確認出来た。

(1), (2), (3)の調査実験から得られた結果から、おおよその立体造形と描画の発達段階の共通性等を明らかにすることが出来た。又、子ども達それぞれに表現スタイルの違いや、得意とする表現方法(立体造形, 描画)があることが分かった。これらの成果から立体造形, 描画の領域横断的な教育題材の開発が可能となる。本研究の中でも最終年度に題材開発を行い、協力校で実施を行った。又、開発した題材を冊子にまとめ関係者に配布した。現在各所で実践が行われ始めている。さらに、本研究成果は今後子ども達それぞれの特性や造形スタイルにあった表現や図工の指導方法開発のための参考資料となり得ると考える。

5. 主な発表論文等

(1) 浅海真弓・初田隆・磯村賢知

基底線および基底線に依存した表現に関する研究-描画と立体表現の比較実験と通して-
大学美術教育学会, 『美術教育学研究』, 査読有, 第 48 号, 2016 年収録, pp.17-24

(2) 浅海真弓・初田隆・磯村賢知

粘土造形と描画の発達段階の共通性についての研究-立体の「クッキー表現」と描画の奥行意識を手掛かりに-, 大学美術教育学会, 『美術教育学研究』, 査読有, 第 49 号, 2017 年収録, pp.9-16

(3) 浅海真弓・初田隆・磯村賢知

粘土造形と描画の発達段階の共通性についての研究 -立体と描画の人物表現, モデルの有無などを手がかりに-, 大学美術教育学会, 『美術教育学研究』, 査読有, 第 50 号, 2018 年収録, pp.33-40

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：初田隆

ローマ字氏名： Hatsuda Takashi

所属研究機関名： 兵庫教育大学

部局名：学校教育研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：60273819

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：白石肇

ローマ字氏名： Shiraishi Hajime

研究協力者氏名：藤尾美奈子

ローマ字氏名： Fujio Minako

研究協力者氏名：大西洋史

ローマ字氏名： Onishi Hiroshi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。